

第3章 松浦市の歴史文化の特徴

本市は、北部九州、北松浦半島の北端部に位置し、南は国見山から連なる山々に囲まれ、北は大小様々な島を擁する海に面しています。起伏豊かで、海岸線は複雑に入り込み、高台から海を見下ろす展望スポットも多く、風光明媚なところです。

市域面積の約半分を占める山林は、きれいな水を生む水源としての役割も担っています。山で育まれた水は、川を流れ、農地を潤し、海に注いでいます。

豊かな自然に恵まれる松浦の地は、古くから多くの人々が暮らしてきたところです。松浦の人々の暮らしは、海を介して山とつながり、国外とも交流し、時に軍事的な軋轢の影響を色濃く受けながら育まれてきました。こうした人々の暮らしぶりを今に伝える様々な文化財が市内各地にあり、松浦固有の歴史文化が息づいています。

本市の歴史文化の特徴とは、海がもたらす自然の豊かさや厳しさ、海を介した交流など、海との深い関わりの中で松浦固有の歴史文化が育まれていることです。

松浦市の歴史文化の特徴

海との深い関わりの中で松浦固有の歴史文化が育まれていること

[特徴1] 海辺や河岸等で火成活動や地殻変動の痕跡を見ることができること

[特徴2] 古来より豊かな海産物や農産物に恵まれた地であり続けていること

[特徴3] 海を行き来した武士団「松浦党」の歴史文化が語り継がれていること



[特徴4] 「蒙古襲来」から日本を守り抜いた歴史が海に残されていること

[特徴5] 海がある地の利を活かした産業が栄えたこと

[特徴6] 海と山が身近にあることで風景や暮らしが育まれてきたこと

図 松浦市の歴史文化の特徴

特徴1：海辺や河岸等で火成活動や地殻変動の痕跡を見ることができること

本市は、新第三紀の水成岩の上に、新第三紀後半に始まった火成活動により流動性の高い溶岩が貫入し、広大な溶岩台地が形成されたところです。第四紀に入り、河川等の浸食により溶岩台地が徐々に後退、溶岩台地の周辺は急な傾斜地が形成されました。さらに最終氷期以降の海面変動により玄界灘から海水が入り込み、リアス海岸が続く現在の伊万里湾や島々が形成されました。

市内には、地形の成り立ちを物語る1,800万年前の野島層群などの露出箇所や、玄武岩や砂岩あるいは石炭といった地質鉱物等を見ることができます。また、星鹿半島は黒曜石の産地でもあります。

鷹島の海岸からはサイ類の化石、田ノ平では汽水性貝化石などが発見されています。埋蔵文化財包蔵地も海沿いや川沿いに多く分布しており、地殻変動によって形成された地形が人々の生活に深く関係しています。

当地の地形を活かし育まれた歴史も多数存在します。岩に囲まれ弘法太師が祀られる落合の滝や、今福の梶谷城、星鹿の刈萱城は、地形を活かした人々の営みを感じさせる場所としても貴重な存在です。

このように、海辺や河岸等で火成活動や地殻変動の痕跡を市内随所に見られることが、本市の歴史文化の特徴です。



弁天島岩脈（福島町）



塩浜漣痕群（福島町）



炭獣類の足跡化石（鷹島町）

特徴2：古来より豊かな海産物や農産物に恵まれた地であり続けていること

本市は、古くから海産物や農産物等の食に恵まれてきたところです。

古代から、天皇や神に貢納する食物である「贄」の貢進に関する記録が残り、平安時代には様々な海産物が「宇野御厨」を通して大宰府へと運ばれました。現在も「御厨」という地名が残ります。

港は海産物だけでなく、本市の様々な特産物を運び出す場でもありました。鎌倉時代末期や南北朝時代の文献には、貢牛であった「御厨牛」が名牛として称されています。海に近い地の利を活かして良質な牛が運ばれていたと考えられます。

今日、伊万里湾には多くの漁港があり、アジ、サバの水揚げが日本有数を誇る松浦魚市場もあります。また、ブリ、タイ、トラフグ、本マグロ、クルマエビなどの養殖業も盛んです。特に松浦の海で採れた新鮮なアジを使ったアジフライは、肉厚で臭みが少なく、多くの人々に親しまれる本市を代表する人気メニューになっています。

加えて、中山間地域では棚田での米作りなどの農業が展開しています。山の水は、川を流れ、農地を潤し、松浦の海に注いでいます。山と海は、離れていても、深くつながっています。山での営みがあったからこそ、豊かな海が守られ、海での営みが続いてきたと考えます。

また、平地が少ない土地柄にあって、江戸時代、今福では干拓により農地が広がりました。身を投じて干拓を進めた伝承「丹後の人柱」が伝わっています。

海の幸と山の幸の豊かさから、「はがため」、「のっぺり」、「いもち」などの多彩な郷土食が生み出されており、豊かな食文化が育まれています。

このように、豊かな海と山に囲まれた自然の中で、海産物や農産物に恵まれた地であり続け、固有の食文化が育まれていることも本市の歴史文化の特徴です。



松浦魚市場（調川町）



海を望む土谷棚田（福島町）



とらふぐ養殖の様子（鷹島町）

特徴3：海を行き来した武士団「松浦党」の歴史文化が語り継がれていること

平安時代に「宇野御厨」の管理者として中央政権から派遣された源久（のちの松浦久）が松浦党の祖と言われています。

松浦党は肥前沿岸一帯を拠点に外海にも船を進めた武士団で、国内屈指の水軍と称されました。一族は48に分かれており、「松浦四十八党」とも呼ばれました。外海を知り、海外との交易にも盛んに取り組んできたことで知られています。日本史の舞台にもたびたび登場し、源平合戦、朝鮮進出、蒙古襲来で活躍しました。

松浦党に属する諸家は、「一揆契諾」という合議制により結束していたことも知られています。もめごとを武力で解決することを禁じ、領主たちが合議のうえ多数決で裁定する、女性の相続権を認めるなど、民主的な体制をとっていました。

市内には、松浦氏の居城である梶谷城跡が海を一望する位置に築かれているほか、久が到着したと言われるぎぎが浜、松浦氏の子孫や家老等を祀る墓等の文化財が多数残ります。その中には、松浦党梶谷城跡（県指定史跡）、文禄の役松浦家供養塔（県指定史跡）、旧宛陵寺跡（市指定史跡）など、多くの指定文化財も存在します。

松浦一族の系譜は複雑ですが、その子孫と伝えられる市民も多く、松浦党の活躍ぶりはそうした市民の誇りとして受け継がれています。

このように、海を行き来した武士団「松浦党」の発祥の地であり、松浦党に関連する文化財が身近に残っていること、一族の結束の強さや水軍としての活躍が今なお語り継がれていることは、本市の歴史文化の特徴です。



松浦党梶谷城跡（今福町）



文禄の役松浦家供養塔（今福町）



ぎぎが浜（今福町）

特徴4：「蒙古襲来」から日本を守り抜いた歴史が海に残されていること

本市は、鎌倉時代中期の蒙古襲来の舞台となりました。

文永11(1274)年の文永の役では、鷹島周辺が襲撃されました。弘安4(1281)年の弘安の役では、鷹島沖に停泊していた元軍の船が暴風雨にあい、松浦党をはじめとする鎌倉武士の活躍で壊滅したことで知られています。来襲した船は4,400隻という世界史上最大級の数であったと言われています。約750年前の国難から日本を守り抜いた歴史が刻まれた場所の一つが松浦の海なのです。

このような激動の歴史の舞台である本市には、蒙古襲来の戦勝祝いに由来するとも言われている鷹島の島踊りや、元軍船に夜討をかけた名残とも言われる和船競漕(せいぐろ)、蒙古襲来にまつわる遺跡・遺物・伝承地が多数存在します。

海底で発掘し、引き揚げた遺物は、長年にわたる水中遺跡の調査成果です。令和4(2022)年10月には、約750年前に沈没した元軍船の木製いかりを引き揚げました。いかりは鷹島町神崎免の沖約50メートル、深さ約20メートルの海底から出土しました。重りとして長さ約2.3メートルの石材(517.5kg)を本体に貫通させた「一石型」で、鷹島沖では初めて見つかったものです。引き揚げにあたっては、ガバメントクラウドファンディングで資金が集められました。一般の人々の思いで実現した木製いかりの引き揚げも後の世に誇れる歴史的出来事です。

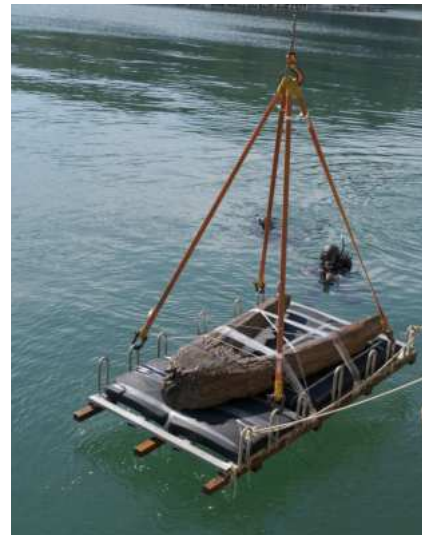
このように、蒙古襲来の歴史を現在まで色濃く受け継ぎ、そして水中遺跡調査の最先端を進んでいることは本市の大きな財産であり、本市固有の歴史文化の特徴です。



管軍総把印



鷹島2号沈没船(撮影・編集 町村剛)



木製いかり引き揚げ

特徴5：海がある地の利を活かした産業が栄えたこと

本市は、かつて炭鉱で栄えたまちです。

江戸時代には石炭の産地として、海がある地の利を活かし、産出した石炭を近くの港から回漕していました。明治時代に入ると各地区に採炭鉱区ができ、石炭採掘が盛んになりました。昭和18(1943)年には、陸軍船舶隊の根拠地に指定されていた新御厨港をはじめ、今福、調川、志佐、福島港も石炭積出港としての役割を担うようになりました。

炭鉱のまちとしての繁栄を伝える文化財として、福島や飛島などには石炭の採掘や積出に関わる遺構や炭鉱従事者の慰霊碑など炭鉱関連の近代化産業遺産が残っているほか、福島歴史民俗資料館や調川民俗資料館において炭鉱で使われた工具や坑内の様子を伝える展示を行っています。

また、石炭の海運業で富を成した実業家である長醫秀夫が星鹿地区の高台に建てた海を望む別荘は、旧長醫家住宅として今も往時を偲ばせています。

昭和47(1972)年までにすべての炭鉱が閉山し、代わりに産業開発と企業誘致を展開していきました。石炭積出港だった志佐の黒潮港跡地には石炭輸入のための専用岸壁を備えた石炭専焼火力発電所が建設され、現在に続く雇用や宿泊業、飲食業などの活力を創出しています。また、海運に便利な福島の海岸部には液化石油ガス基地も建設されました。海運に適した場所という強みを活かし、石炭産出から電力と液化石油ガスの供給へ、エネルギー産業を柔軟に転換し、まちの賑わいを生み出し続けています。

さらに本市は、石工業も盛んです。長崎県の伝統的工芸品である阿翁石は有名で、福岡市の筥崎宮の一の鳥居も阿翁石を用いたものと伝えられています。石工の技も卓越し、市内には玄武岩や砂岩を用いた神社の鳥居、狛犬、燈籠などを数多く目にすることができます。

このように、海のある地の利を活かしながら、エネルギー産業や石工業といった産業が栄えてきたことも本市の歴史文化の特徴です。



旧徳義炭鉱の積出棧橋（福島町）



旧長醫家住宅（星鹿町）



＜参考＞筥崎宮一の鳥居（福岡市）

特徴6：海と山が身近にあることで風景や暮らしが育まれてきたこと

本市は、海と山が身近にある暮らしが脈々と受け継がれてきたところです。市内各地には、船が行き交う水道やいろは島、海を見下ろす棚田、飛島のボタ山や炭鉱の名残を偲ぶ風景、恵比寿さんが迎える漁港、歴史的な面影が残る御厨街道、海沿いを走る松浦鉄道から見える車窓、ひゃーしが独特な農村など、海と山が身近にあることで育まれてきた人々の暮らしを物語る風景が数多く残されています。

また、市内には、伝統的な漁村集落や農村集落を中心として、ジャンガラ、講、浮立、お宮日、奉納相撲、大般若、鷹島の島踊など、無病息災や豊漁、豊作祈願、雨乞いといった海や山での暮らしに関わる伝統行事も数多く受け継がれています。港を舞台にした星鹿おくんちの漁船パレードや先祖の霊を弔う精霊船など、海や川が舞台になる行事が受け継がれています。豊臣秀吉の朝鮮出兵での必勝祈願にはじまる流鏝馬、端午の節句に男子の健やかな成長を祈る和船競漕（せいぐろ）、勇壮な御厨蛇踊り^{じやおど}なども受け継がれています。かけ声をかけながら邪気を払う正月行事のもぐら打ちや祝い口上とともに釜蓋^{かまぶた}をかぶせて婚礼を祝う釜蓋かぶせをはじめ、年中心事には音も欠かせません。太鼓や笛、鉦^{しょう}なども継承されています。

このように、海と山が人々の暮らしの身近にあったことで、文化的な風景や伝統的な行事が育まれ、今に受け継がれていることも本市の歴史文化の特徴です。



漁船パレード（星鹿町）



田ノ平浮立（志佐町）



百手講（志佐町）

